戦後派文学と世田谷

紅野謙介

コロナ禍がまだ始まったばかりの二〇二〇年一月、坪内祐三はまだ六二歳で急逝した。その遺作『玉電松原物語』（新潮社）が出たのが同年一〇月。雑誌「東京人」で長く編集者をつとめた坪内の最後の著作が自分の住んだ世田谷と玉電（いまの東急世田谷線）をめぐるエッセイとなった。軽妙な語りと圭角ある批評の鋭さで多くの読者を得ていただけに惜しい気もしたが、「私」を決して手放さなかった辛口のエッセイストの、自分を生んだ身の回りの商店街や街角、風物、そこで手に入れた本や雑誌や、人や食べものとの出会いを懐かしげに語る文章に、心なごむものがあった。

そうか、坪内祐三は玉電松原駅周辺で育ったのか。勤め先の大学がすぐ近くであったから、高級住宅街のように見られ、また最近はそのように売り出してもいるが、思いのほかに中途半端に古い、でも美味しい肉屋や豆腐屋が点在し、なかなかどうして流行に一歩出遅れた心地よさがあった。その象徴が東急世田谷線で、車両はわずか二両。このところの私鉄のようにやたら車両が長いわけでなく、踏切を待たずにすむのも便利だったし、電車と住宅の距離の近さも楽しくて、何度も世田谷線の沿線駅を乗り降りして、周辺を散策した。

坪内祐三は、戦後派のなかでも思想や政治を男性の言葉で語る作家たちは好きではなかったろうが、つむじ曲がりのアナキストには親近感を抱いたに違いない。

戦後派というカテゴリーをどう定義するかはなかなかにむずかしい。戦前のマルクス主義運動を経験し、いったん転向の傷痕を負ったものたちと定義すると、野間宏、椎名麟三らは第一次戦後派と呼ばれ、党派との距離がつねに意識のなかにあった。雑誌「近代文学」に依った荒正人、埴谷雄高、平野謙、本多秋五、佐々木基一、小田切秀雄らもそこに含まれる。ただ、マルクス主義から切り離して、戦争を通して死に直面した実存的経験を中心にしてより芸術的なアヴァンギャルドを目指したとすると、中村真一郎、福永武彦、加藤周一から、大岡昇平、武田泰淳、堀田善衛、安部公房らが加わってくる。祖国を喪失し、世界が崩れ落ちる瞬間を目の当たりしたものたちには、どこか荒涼とした穴がぽっかりと心身にあいていたことだろう。それは戦前から活躍していた太宰治、坂口安吾や織田作之助、石川淳らにも共通していた。

彼らもまた、世田谷区を中心に東京の西部地域に居をかまえたものが多かった。椎名麟三は世田谷区松原であるし、平野謙は喜多見である。中村真一郎も五〇年代には世田谷在住であり、加藤周一も一貫して上野毛に住んでいた。大岡昇平は『成城だより』と題した、文学・映画・音楽など同時代の文化をめぐって鋭い批評を展開した日記の著作まである。梅崎春生はやはり松原に住んだのち練馬へ、埴谷雄高は吉祥寺、荒正人や佐々木基一は杉並在住であった。こうした戦後派作家と付き合いが長く、その継承者を任じていた井上光晴は桜上水団地に住んでいた。先日亡くなった成城在住の大江健三郎も初期は戦後文学にこだわっていた。

大空襲によって、東京東部はもっともひどく、新宿、渋谷も焼かれている。世田谷区も明治半ばから三宿、太子堂周辺に軍施設が増加するにしたがい、空爆の対象とされ、世田谷区役所庁舎を焼失するのだが、それにしても東京の下町や山手地域に比べれば被害が少なかったと言えるだろう。中央線や京王線、小田急線、そして玉電が整備されるにつれて、東京中央とのほどよい距離が多くの住民を集め、そこに文学者もふくまれていたのである。

兵庫県姫路の出身である椎名麟三は、早くに両親の自殺、家族離散という厳しい生い立ちのなか、旧制姫路中学を中退して、職を転々とした。ようやく勤めた宇治川電気の鉄道事業部門（現在の山陽電気鉄道）で、一九二九（昭和四）年から三年ほどは車掌をつとめていたという。『深夜の酒宴』や『永遠なる序章』の作家が制服制帽に身を包み、「次は須磨寺〜、次は須磨寺でございます」とアナウンスしたり、乗客の硬券切符に改札パンチを入れたりしていたと想像するのは楽しい。そうした手応えのある、ありふれた仕事の日々の一方で、労働組合を組織してストライキをはかり、警察につかまって拷問を受けたりすることが切れ目なく連続していた。獄中体験もあり、信じた思想も捨てることを誓約させられている。もともと自分を肯定しにくい環境に育ち、長じてふたたび人生の価値がすべて失われるような絶望的な経験をへて、いったいどうやって愛とか幸福とかを口にすることできるのか。椎名はそんなことをずっと考えていた作家である。宇治川時代の記憶があったからであろうか、椎名は玉電のすぐそばを散策することが多かった。椎名麟三といえば、通り過ぎる玉電を背景

に柵によりかかる写真がよく使われる。

石川淳もまた、一九四七（昭和二二）年に世田谷区北沢に住み、いったん港区芝高輪に移るものの、ふたたび杉並区清水町へ、そして最後は渋谷区初台に移り住んだ。今回、この年報に翻刻される日記についていえば、上巻の一九五〇（昭和二五）年から翌年にかけてのものは芝高輪時代にあたり、下巻の一九五二（昭和二七）年から五四年にかけては荻窪駅に近い杉並区清水町に移る前後に書かれたことになる。

明治・大正期の作家たちは、東京市内のかなりの距離を歩き回っている。駿河台から本郷、千駄木をぬけて日暮里、南千住までぶらぶら歩きをするのは日常茶飯であるし、両国から品川まで足を伸ばすこともあった。市電と組み合わせれば、その行動半径はいまの下町から山の手を広くカバーしたであろう。それが昭和期になって鉄道網が整備され、電車に乗っての往復が可能になり、郊外の範囲が西に拡大した。戦争は都市機能をいったん壊滅させたが、復興のプロセスのなかで都内の繁華街はより多極化し、住まいとの距離感を一変した。

こうした都市の変容のなかで、石川淳の日記を読むと、日々の動きが実にめまぐるしいものだとわかる。それはおそらく一九五〇年代にかかっていることもあるだろう。敗戦後すぐの混乱と無秩序は占領期の終わりとともに姿を変えていった。さっと眺めるだけで分かるように、この日記の大半は、同時代の作家やさまざまな出版社の編集者たちとの交流、原稿と原稿料、印税、前借のやりとり、そしてそのあいまをぬうように言及される酒場放浪記で占められている。

一九五〇（昭和二五）年六月にはこんな一節がある。

○六月二十二日（木）晴。文藝春秋新社の銀座五丁目に移転したるにつきその社屋を見に行く　文学界七月号を一閲するに篠舩続稾の「二」「三」とあるべきところを恣意に「一」「二」と掏りかへたるを発見せり　すなはち抗議書を提出す　社員数名とはせ川におもむきまたノンシヤランに立寄りさらにアヤをひきつれて三田に至つてのむ　連日昏酔わが生活もまた乱れたるかな。この日山形沢渡恒より桜桃一箱を贈らる。応酬ひらくより桜桃箱をこぼれたり。また太宰全集続刊の件に

椎名麟三　玉電の線路沿いにて

つき津島美知子に書を遣る

文藝春秋社を創業した菊池寛は、戦後、公職追放に伴い、いったん社の解散を宣言する。これに対して佐々木茂索や池島信平ら社員有志が発起して一九四六（昭和二一）年六月に新たに株式会社文藝春秋新社を立ち上げた。一九六六（昭和四一）年に紀尾井町に本社を移し、「株式会社文藝春秋」に社名変更するまで、同社は「文藝春秋新社」と呼ばなければならない。その文藝春秋新社は「文藝春秋」「オール読物」「別冊文藝春秋」、そして文芸雑誌の「文學界」を発行して、この時期、順風満帆の勢いにある。銀座の新社屋を見学した石川に「社員数名」が同行し、「連日昏酔わが生活もまた乱れたるかな」という感慨を抱かせるまでに至る。戦中戦後を貫いてぶれなかった文学に、多くの読者は希望の星を見て、人生の深い部分にふれるものだと感じていた。出版社もまた商品価値という以上に、一本のペンだけで世界に立ち向かうものとしてもてなしたのである。

日記に登場する主な出版社をあげてみよう。文藝春秋新社はもちろんのこと、新潮社、作品社、月曜書房、小山書店、糸書房、目黒書店、河出書房、角川書店、六興出版社、講談社、筑摩書房、中央公論社など枚挙に暇がない。今はない出版社もあるが、戦後は出版文化が異様に開花した時期だったのである。厳しい情報統制に目をくらまされ、読みたいものも読めない暮らしを強いられた人々は、活字に次の時代のヒントを探り、そこに戦後民主主義の薫りをかごうとしていた。フランス文学の翻訳者であり、江戸文学に造詣が深く、森鷗外や永井荷風の系譜を引きつぎながら、文学の前衛を走る石川淳は、太宰治、織田作之助が倒れ、坂口安吾が病を抱えるなかで、時代の中心に位置づけられることになる。戦後派作家がどうしても日本共産党との関係に腐心し、ふりまわされるなかで、もっと大きな視野をもつ石川の存在は読みたい作家であり、同時にともに酒を酌み交わして、談を交わしてみたい文学者だったのであろう。

その一方でこういう記事も日記には挟まれている。

○六月二十五日（日）晴。北鮮の兵隊三十八度線の堺を越えて南鮮に侵入す。いくさふたゝび来らんとす

かつての旧植民地であり、関わりも深かった朝鮮半島での争乱は、戦争の記憶がまだまだ色濃い日本にとって異様な緊張と不安を強いたにちがいない。「朝鮮のいくさいよいよ急ならんとす」（二十六日）、「今朝北鮮共産軍京城に攻め入つてこれを占領すとつたふ」（二十七日）、「朝鮮の風雲益々急也　アメリカの海軍空軍出動す」（三十日）、「アメリカ兵朝鮮に上陸す　戦乱の機迫れるに似たり」（七月一日）。どこまで拡大し、飛び火するか分からない。かつて日本が侵略しようとして果たせず、内戦につぐ内戦をくりかえして永遠にまとまることはないとされていた中国がその前年に中華人民共和国となって、世界史上、二番目の共産主義国家となった。その全貌は分からないながら、巨大な国が生まれ

変わって、新たな活力を生み出そうとしている。代理戦争の戦場となる隣の半島を意識しながら、ペンをふるい、酒を飲む日々がつづく。

だからこそ、新たな書き手は発掘されていかなければならない。安部公房や島尾敏雄に対する石川淳の友情は、ただ優しさのあらわれではなく、こうした書き手たちが次々と現れていくことによって、編集者を、読者を動かし、心を揺さぶっていかないかぎり、現実は変わっていかない。そういう信念があったからだろう。戦時下の、落ち着きのない日々をくぐりぬけた作家は、一喜一憂せず、不安にふりまわされずに過ごすスタイルを守る。石川淳の酒は現実を忘れるためのものではない。飲むほどに酔うほどに冴えていく。

たとえば一九五一（昭和二六）年にはこんな一日が出てくる。

○九月十五日（土）くもり小雨、午後東中野モナミにて近代文学社主催安部公房の受賞祝賀会に出席す、帰途薄暮におよんで佐々木基一野間宏岡本太郎とともに銀座はせ川におもむきまたよし田にて小酌、岡本酔つて佐佐木（ママ）にからむ、新ばしにて三人に別れエスポールにおもむくにたまたま久保田万太郎林房雄に逢ひさらにハムレツトにてのむ、ナポレオンの某女をつれて烏森若竹にて小酌　車にて某女を赤坂までおくりて深夜帰宅

モナミは東中野駅西口に近い洋食レストランで結婚式場も兼ねた店である。もともとは洋菓子店白十字の姉妹店として銀座に開業し、東中野に支店を出した。店の命名者は岡本かの子。だから、岡本太郎はここの常連であった。石川淳は安部公房の短篇集『壁』（月曜書房、一九五一年五月）に序文を寄せていた。その表題作『壁―S・カルマ氏の犯罪』（初出「近代文学」一九五一年二月）が同年七月、その年度上半期の芥川賞を受賞することになったのである。そこで雑誌「近代文学」に拠るものたちの祝賀会に参加したあと、今度はご一行をつれて、銀座おなじみの「はせ川」に繰り出した。そこから「よし田」、新橋の「エスポール」「ハムレット」「ナポレオン」、烏森の「若竹」へと梯子酒とあいなった。新橋では旧世代の久保田万太郎と林房雄に遭遇しており、顔ぶれからするとまったく異質な文学者集団がニアミスをしているのもおかしい。

しかし、酔眼朦朧としているものは、このような正確な日記は残さない、残せもしない。推していた安部公房の受賞はうれしかったであろう。しかし、とはいえ、勝負はこれからだ。まだ二〇代の安部がどうなっていくのか、それを見守るしかない。そのときまわりにはどういう作家がいるのか。石川淳はこのときすでに五〇歳を超えている。ひとまわり下の世代の作家、評論家、アーティストを前に石川の眼は伏し目がちではありながら、じっと見つめていたにちがいない。日記の面白さはそうした想像をかきたててやまないところにある。

（日本近代文学研究者）

「石川淳日記」一九五〇・一九五一年分について

山口俊雄

このたび、世田谷文学館所蔵「石川淳日記」一九五〇・一九五一年の分が翻刻された。

一口に日記といってもいろいろなタイプがあるが、石川淳の場合、何（どんな小説・エッセイ）を書いたか、何（特にどんな書籍）を買ったか、誰が来訪したか、誰とどこ（特にどこの酒場）で会ったか、についての簡潔な記述が大半を占める。作品の執筆状況、脱稿の時期、編集者に手渡した時期などが書き込まれ、また、どこどこの店で誰々と飲んだという動静・他者との交流が書き込まれているわけであるが、これは作家という個人事業主としての営業活動に関わる必要不可欠な記録、備忘録と言って差し支えあるまい。

この基本的な情報（人名・作品名）の備忘録という性質が優先されているせいか、それらについての価値判断・評価の記載は少ない。そしてまた、時事や風俗・巷間の出来事への言及もほとんどない。感想・思惟内容を丁寧に書き残すという役割を日記には担わせなかったようだ。

以下、拙稿では、（一）洋書・古典籍にわたる書籍の購読状況、（二）作家生活、他作家との交流、という大きく二つの面に着目して、「石川淳日記」の特徴をスケッチしてみよう。

（一）書籍の購入

洋書

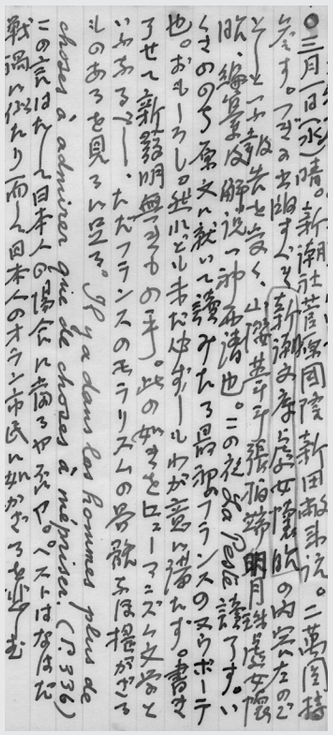
作家である以上、書くために読まなければならない。とりわけ石川淳のようにブッキッシュな作家の場合、なおさらである。洋書と古典籍については、購入した店、書名が具体的に記載されており、網羅性も高いと思われる。

まず洋書から見ておきたいが、戦中から途絶えていた洋書の販売がやっと再開したのが、一九五〇年一月だったということに留意する必要がある。例えば『丸善百年史』をひもとくと、《昭和二十四年十二月一日に、外国為替・外国貿易管理法と輸出貿易管理令が公布され、翌二十五年一月から民間貿易の開始を許可するという発表があった》（『丸善百年史 下巻』丸善、一九八一、第二部 復活の曙光 第一章 洋書輸入の再開 待望の民間貿易開始、一一九六頁）とある通りである。

さればこそ、一九五〇年一月七日、《Jean Cocteau : Théâtre1》を購入したとある直後に《戦後はじめて購ふところの新著のフランス本也》という記述が続くわけである。洋書販売再開の喜びは、例えば高見順も、一九五〇年一月四日、《[日本橋] 丸善での洋書注文は何年ぶりのことか。青春を感じる。》（『高見順日記 第八巻』勁草書房、一九六五、三五二、三五三頁）と記している。

二月十五日、二十三日の記事からは、《Albert Camus : La Peste》が売られているのを窪田啓作が見付け、石川が窪田に購入を依頼し、入手したことが分かり、洋書販売再開といっても、どの書店にも出ているというような状況ではなかったことが分かる。

こうして手間を掛けて入手した「ペスト」だが、三月一日の項に、読後感がやや詳しく書かれている。《いくさののち原文に就いて読みたる最初のフランスのヌウボーテ也》と、戦後の新作を原文で初めて読んだと、ここでも洋書販売再開に関わる心の弾みを記した上で、《Il y a dans les hommes plus de choses à admirer que de choses à mépriser. (P.336)[人間には、軽蔑するものよりも賞賛すべきものがたくさんある] この言はたして日本人の場合に当るや否や。ペストはなはだ戦禍に似たり而して日本人のオラン市民に如かざるを悲しむ》と作品末尾の条を引用しつつ、《戦禍》に対する彼我の違いに思いを致している。



七月十七日、七月二十一日の記述からは、窪田啓作が持っている《Albert Camus: L'Etranger》を石川が借覧して読んだことが分かり、ここからもどこでも買えるものではなかったと推測される。一九五一年の三月二十九日、九月二十二日、十月十二日の記述では石川が窪田啓作や河上徹太郎に洋書を貸している。

一九五〇年九月三日、《ジャン・コクトオ La difficulté d'être

を読むにこれまた一篇の好読物なりき》で始まる記述は、五十代になって死を意識したコクトーと五十代になった自身を引き比べて、《余性疎懶いまだ死の近づけることをおぼえず　茫々然として白昼の夢にふける　笑ふべきのみ》と締めくくられ、やや自嘲的ながら、自身の年齢についての述懐が示され、興味深い。

全体像をざっと掴むために、以下、購入日ごとに、著者名を挙げてみよう。

三越　一月七日　コクトー
白木屋　三月三日　サルトル、ヴァレリー（二冊）
紀伊國屋書店
八月三十一日　サルトル、アラン、ジュリアン・バンダ
十月八日　クローデル、サルトル、ルーセ、ローゼンタール、アラン、トロワイヤ
十一月一日　カミュ（二冊）、サルトル（二冊）
十二月十二日　ジュリアン・バンダ
十二月三十一日　カミュ、ジッド、クローデル
一九五一年　三月一日　ジッド
四月十日　ヴァレリー、アラン、アンリ・モンドール、カフカ
五月一日　プルースト
五月二十九日　ジャム、ジッド、カミュ、サルトル
六月十九日　アラゴン、アラン、サルトル、カミュ（二冊）
八月一日　ジャック・マリタン、アラゴン、サルトル、ヴァレリー
九月八日　ジュネ、ジロドゥ、サルトル、アラゴン（二冊）、クローデル
九月二十九日　クローデル、アラン（二冊）、カミュ
十一月四日　ヴァレリー（二冊）、ヴェルコール、イヴォン・ベラヴァル
十二月二日　ジロドゥ
十二月二十二日　アヌイ、ボーヴォワール（二冊）、アラゴン、シュアレス、クローデル
（入手経緯不明　一九五一年十月二十八日　ブランショ）

アラン、ヴァレリー、クローデル、ジッドといった戦前から石川淳が関心を持っていた文学者の名前がある一方で、サルトル、カミュ、アラゴンといった同時代の文学者の名前があり、さらにジュネ、アヌイ、ボーヴォワールといった新しい文学者の名前も見出すことができ、同じ文学者とじっくり付合う態度と、関心の幅を広げようという意欲との両面が窺われよう。

邦訳で読んでいる海外小説もある。まだ裁判沙汰になる前であるがローレンス『チャタレイ夫人の恋人』（一九五〇年六月十日）、訳者・河盛好蔵から贈られたゲオルギュー『二十五時』（八月四日）、ローレンス『息子と恋人』（一九五一年一月三日）、フォークナー『サンクチュアリ』（一月二十一日）など。『息子と恋人』については、《最後に母を突き放して外国に飛び立つやうに書きたらばよかりしならむ　原作のままにては恋愛観念は閉鎖されたるごとくにておもしろからず》との評言があり、石川淳の小説観が窺われて興味深い。

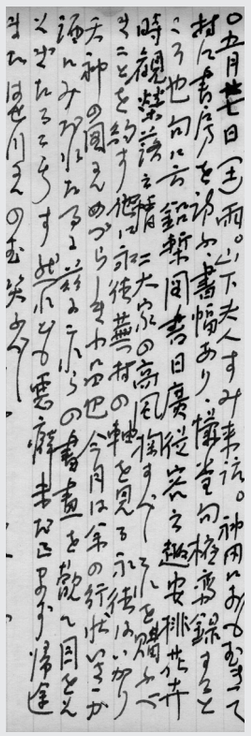
少々面白い経緯をたどるのが『小公子』である。一九五一年三月七日、「文藝」編集者である山川朝子から《その著小公子を贈らる》とあり、四月二十二日、《山川朝子のために文藝に寄せむとして小説草稿小公子十三枚けふ一日にて書く》とあり、贈られた著作が、創作のきっかけになったようである。

古典籍

やっと販売再開となった洋書を熱心に購う一方で、もう一つ石川が大事にしていたのが、古典籍の購入である。古書店名と訪問日を挙げておくと次のようになる。

村口書房
一九五〇年五月二十七日、六月五日、十一月二十日、十二月二十九日
一九五一年五月二十二日、十二月二十九日
山本書店　一九五〇年六月十六日、一九五一年三月三日
大屋書店　一九五〇年十月四日
井上書店　一九五一年二月六日

一九五〇年五月二十七日の記述にこうある。《神田におもむきて村口書房を訪ふ。書幅あり、慊堂句桉斎録するところ也［略］二大家の高風掬すべし　これを購ふべきことを約す　他に永徳蕪村の軸を見る　永徳はいかり天神の図にてめづらしき小品也　今月は余の行状いさゝか酒にみだれたるに茲にこれらの書画を観て目をそそぎたるここちす　然れども悪癖未だ止まず帰途またはせ川にてのむ　笑ふべし》



せっかく目をそそいだのに、悪癖に戻ってしまうという自嘲はさておくとして、ここに名前の挙がった慊堂桉斎の書幅も、いかり天神も、石川がのちに発表する「乱世雑談」というエッセイで取り上げられることに注意したい。これはこの時だけでなく、他の日、他の古書店からの購入物についても同じである。言及の無いものを探すほうが難しいぐらいである。購入した洋書の場合と同様、購入した古典籍もまた、石川淳のエッセイの素材となるも

のであった。

一九五一年五月八日、《孔叢子読了。この書の記載信じがたきふしあれどもなほ一読に堪へたり　ちなみに大田南畝旧蔵本にて南畝自筆の書入またその学に勉めるたることをしのばしむ》とある。石川淳の南畝好きは有名だが、書き入れから南畝の学に勉めるさまに思いを致すのは、南畝の特徴をよく捉えたものと言えよう。なお、「孔叢子」は、エッセイ「仕事について」（夷齋筆談）で取り上げられる。

戦後最初のエッセイ「夷齋筆談」

石川淳の洋書・古典籍への関心は見て来た通りだが、購って読んだ書籍の内容を踏まえてエッセイが書かれることになる。夷齋ものの走りとなる連載エッセイ「夷齋筆談」にこの時期購入した洋書・古典籍が取り上げられることは既に述べた通りだが、実は「夷齋筆談」シリーズ成立への道は必ずしも平坦ではなかった。

一九五〇年七月十一日、二十七日、二十九日、三十日、八月七日、二十九日と日記の記述を追ってゆけば、単発ないし短期連載程度にしたい「新潮」編集者サイドとじっくり書き続けたい石川淳との思惑の食い違いの中、「面貌について―夷齋筆談一」が書き上げられるに至ったことが分かる。

なお、七月十三日のアイディアメモ的な記述は、石川がまだ「新潮」にエッセイを書くことを肯んじない段階のものだが、その内容は、「面貌について」「恋愛について―夷齋筆談四」に生かされることになる。断じて書くための材料がなかったわけではないのだ。

八月二十九日、《夜来牛込二葉荘にて面貌について（夷齋筆談一）を脱稿三十枚　いくさののちはじめて書きたるエセエ也　［略］前夜窪田啓作来　窪田サルトルの翻訳を新潮に寄すといふ　余の筆談もまた新潮に連載すべきもの也》とあり、おそらく牛込双葉荘で一晩カンヅメにされて完成したものだろうが、この日の記述から、戦後初めて書いた《エセエ》に対する気負いと、自分の《エセエ》は引き続き連載ものとしてじっくり書き継がれなければならないとする石川の覚悟が窺われて興味深い。

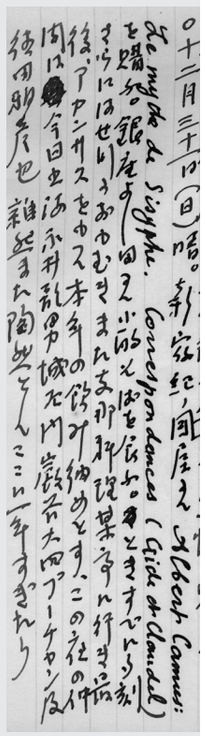
石川の言う《エセエ》とは、おそらく元のフランス語 essai にある「試論」ぐらいの意味だろう。石川は戦後、小説以外に「うまやばし」（「苦楽」一九四七・一一）、「太宰治昇天」（「新潮」一九四八・七）、「ニセモノ記」（「作品」一九五〇・六）と一般に随筆とかエッセイとか呼ばれるものを発表しているが、「夷齋筆談」は、そういうものとは一線を画したものなのだろう。

連載一回目を書き終えた時点でのこの気負いだが、結果的に、夷齋筆談は連載十一回、洋書・古典籍（和漢書）への言及をふんだんに取り入れた思弁的高踏的な他に例を見ない実にユニークな essai（試論）集として結実する。単行本は、和本仕立ての豪華限定版での刊行となるが、一九五一年十月二十六日、《新潮社新田敞来話、夷齋筆談出板（ママ）につき造本見本として物理小識　侗葺（ママ）筆記豆腐百珍を貸す》という記述に接すると、石川が自分の趣味を押し出して楽しんでいる様子が目に浮かぶ。

（二）作家生活、交流のあった作家たち

何を買ったか、何を読んだか、何を書いたかについて、ざっと見てみたので、次に見るべきは作家生活、他の作家らとの交流面となる。

個人事業主としての「営業」活動のさま、誰と会った、誰とどの店に行ったといった事実関係の記録ともなっているということは既に述べたが、営業活動とは言え、飲み過ぎではないか、ハシゴをしすぎではないかと思わずにはいられない。事実、一九五〇年二月五日、《昨夜また乱酔　今朝またしたがつて昏昏、やれやれ也》。七月一七日、《乱酔　言語道断またしてもわが生活のみだれわれながら目もあてられず》。十二月三十一日、《雑然また陶然としてここに一年すぎたり》。一九五一年十二月三十一日、《一寝入して目さむれば夜半三時也　一年のぶら〳〵ぐらしここに終る、かへりみるに諸事力をつくすこと十分ならざりしもの多し　売文の毒おそるべし　意あまつて才足らざることをかなしむ　すなはち床に鉄斎を掛け座右の書あれこれをひらきて黙黙夜をおくる》。まだまだあるが、売文業者的実存への反省的言辞を拾うのはこれぐらいで十分だろう。



個人事業主として、出版社社員・編集者との付き合いがあるのは当然だが、何よりも気になるのは、酒場その他で会う作家・文筆家・芸術家たちの顔ぶれであろう。

三島由紀夫（特に注目すべきは一九五一年二月二十一日の記述か）、井伏鱒二、三好達治、檀一雄、河上徹太郎、城左門、井上友一郎、川端康成、田村泰次郎、中野重治、林芙美子、林達夫、小林秀雄、宮川曼魚、勅使河原宏、岡本太郎……と枚挙に遑がないが、中でも交流の盛んな人物としては坂口安吾の名前が挙がる。

坂口安吾と久保田万太郎

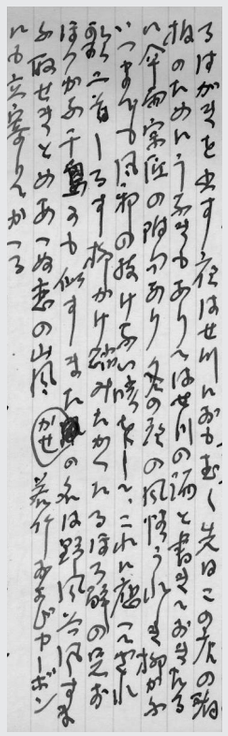
一九五〇年四月十三日から十五日までの熱海滞在時に大火に遭い、伊東で安吾に遭遇しているが、五月二十三日の記事で、安吾が文章にしたこと（「熱海復興」、「文藝春秋」一九五〇・七）に触れている。六月二十六日、《坂口ペニシリン病なるがごとし》とあるが、「坂口安吾年表」には《体調を崩し、［六月］二六日から七月五日まで南雲医院に入院》（『坂口安吾全集 別巻』筑摩書房、二〇一二、七四九頁）とある。七月二十四日の記事によれば、東

京パレス行きが、取材として行く予定だった安吾・林芙美子と酒場（はせ川）でたまたま同席したところから同行するめぐり合わせになったことが分かる。石川自身は何も書かなかったが、八月一日、《坂口安吾先日の小岩のあそびを安吾巷談に書き実名入にてあらぬことをも口走りたるよし池島信平の話也　安吾の悪癖こまつたやつ也》と、安吾に書かれてしまったこと（「田園ハレム」、「文藝春秋」一九五〇・九）をぼやく。

一九五一年に入ると、八月三十一日、《文藝春秋社にて坂口安吾に逢ふ、坂口疲労困憊のていにて見るに堪へず　わづかに数語を交して別れたり》とあるが、これは「税金闘争」中のこと。十月十二日、《文藝春秋社員中野修迎へにて代々木大井廣介宅に坂口安吾を訪ふ。［略］坂口に逢ふにその神経いさゝか異状を呈するに似たり、競輪告発事件にて強迫観念の兆あきらか也》。税額にまた競輪の判定に戦う安吾が心身をすり減らしているさまを書き留めている。

安吾は石川にとって親しい友だったわけだが、それとは違って石川が居ずまいを正して付き合うような興味深い交流も書き込まれている。

一九五〇年十二月六日、《はせ川にてうなぎの看板を書くうなきもありてはせ川の酒　たれかにあとをつけてもらふつもり也》、一九五一年一月十一日、《夜はせ川におもむく　先日この店の看板のためにうなきもありてはせ川の酒と書きておきたるに傘雨宗匠の附句あり　冬の夜の風情うれしき柳かな　いつまでも風邪の抜けない咳をして、これに応へてざれ歌二首しるす　柳かけ踏みたかへたるほろ酔の足おほつかな千鳥にも似す　また　かせの名は野風谷風すまふ取せきとめあへぬ恋の山風》。石川が誰かの付句を期待しながら七・七を作ってみたところ、何と、傘雨宗匠（久保田万太郎）が付けてくれたのだ。よほど嬉しかったのか、石川は《ざれ歌二首》まで詠んでいる。



この付け合いには続きがあり、一月十九日、《先日の傘雨の句に附けて　身はやつせとも松風を聴く。しかれども前句に風邪とあれば松風は不束なり改むべし》、一月二十一日、《昨夜はせ川におもむき前夜の附句をあらたむ、身は窶せども京訛なるとす。》

そもそも石川が《二葉荘にてはじめて久保田万太郎に逢ふ》の一九五〇年八月二十九日のこと、いま見た同席しないままの付句のやりとりを挟んで、一九五一年八月六日、《文藝春秋社にて久保田万太郎と逢ひつひに深更に至るまでともにのむ　ブルドッグよし田ナポレオンとのみ廻りて最後はひとりアカンサスに眠る、同郷の先輩久保田の万さんとのむこと今宵はじめて也》。浅草の同郷人として若い頃にも見かけたことがあり一定の親しみを覚えていた久保田万太郎と初めて会ったときのこと、初めてさしで飲んだときのことについては、「めぐりあひ」（「月報10」『久保田万太郎全集 第一巻』一九六八）でも触れられているが、付け合いとそれにまつわる不思議な縁についてはこの日記でしかたどれない。

久保万とのやりとりは、他にも一九五一年十月二日、十二月十一日に記されている。

久保田万太郎以外を相手に作った〈句歌〉が、一九五〇年一月一日、四月二十一日、六月二十二日、十一月六日、十二月三十日、一九五一年一月一日、一月十七日、五月二十五日の項に記されている。最後の五月二十五日の狂歌は、「オール読物」（一九五一・八）に掲載されているが、全集等には未収録である。

若手への支援

他に印象的なこととしては、若い書き手を支援する石川の姿である。

まず、安部公房。関連記述があるのは、一九五〇年三月五日（安部が「壁」の草稿を見せる）、十日、四月二十六日、五月三日、二十三日、六月七日（蔵書印制作依頼ほか）、七月一日（蔵書印受け渡し）七月二十日、九月二十四日、十月三日、十日、一九五一年二月六日、三月三十一日、四月七日、十七日、五月三日、八月一日（芥川賞受賞）、八月七日、九月十五日、十月十二日。安部が持ってくる草稿を読み、意見を述べ、出版社に売り込み、『壁』の月曜書房からの刊行、芥川賞の受賞へと、ちょうど安部が本格的に作家デビューするタイミングのところを石川が伴走している。

島尾敏雄についても、一九五〇年九月七日、十四日、十一月二十日、十二月二十五日の記事から分かるように、『贋学生』の閲読に付合い、無事書き下ろし刊行に至った際には付録に寄稿している。その後も一九五一年一月十三日の記事から、引き続き売り込みに協力していることが分かる。

一九五一年九月六日、九月十一日記事から、石川の口利きにより、フランスに留学する加藤周一が《文学界にフランス便りを送る件》が成立したことが分かる。

一九五〇年三月二十五日の記事からは、井澤義雄のアラン論の掲載を「人間」編集者に求めたことが分かるが、これは実現しなかった。

洋書の貸し借りもする窪田啓作の第二小説集の刊行も後押していたことが、一九五〇年二月二十七日、三月二日、四日、六日、二十六日、六月八日の記事から分かる。この小説集の刊行はこの時は実現せず、石川淳没後の一九九〇年に私家版の形で『街燈―窪田啓作短篇集』として刊行される。扉の裏に、《à Jun》とあるのは、かつて石川の努力への謝意からであろう。

『太宰治全集』

作家たちとの交流という観点からもう一件触れておきたいのが、太宰治関連である。

太宰治その人はもちろん既に故人であるが、六月十九日の桜桃忌には、一九五〇年（禅林寺）、一九五一年（新宿・中村屋）ともに出席している。

八雲書店廃業（一九五〇年五月）により中絶していた『太宰治全集』（一九四八年刊行開始）の続刊刊行のために石川が運動し、作品社からの刊行で話が固まっていたことが、一九五〇年五月二九日、六月二十日、二十一日、七月五日の記事から分かる。

六月二十二日、早速、津島美知子に連絡し、二十四日、石川は、彼女より《太宰治が生前着用せる結城紬の裂地をもつて作りたる》ネクタイを贈られている。

一九五〇年十一月八日の記事によれば、《作品社没落》とのことで、結局、作品社から出ることはなく、一九五二年から五五年にかけて、創芸社から新たに刊行し直されることになるが、一九五〇年十二月二十一日の記事によれば、お歳暮に津島美知子からウイスキーを贈られ、年明けて一月八日には、《元旦にこころみたる戯墨を小山清に托して津島美知子に贈る》と、付き合いは続いている。このような形で石川は太宰没後のことも気にかけていたのである。

（三）その他

感想を書き込むことは少ないが、芝居、映画（試写会が多い）、演奏会、展覧会にも頻繁に足を運んでいる。演奏会については、一九五〇年十月二十七日、三十一日のラザール・レヴィ（ピアノ）、一九五一年九月十八日のメニューイン（ヴァイオリン）の演奏は印象的だったようだ。

時事に触れることはほとんどないとはじめのほうで書いたが、レッドパージと朝鮮戦争、それから金閣寺放火事件には触れている。

一九五〇年六月六日《此日アメリカンミリタリスムに依る共産党弾圧はじまり徳田球一野坂参三ら二十余名公職追放さる》、六月二十五日《北鮮の兵隊三十八度線の堺を越えて南鮮に侵入す。いくさふたゝび来らんとす》、二十六日、二十七日、三十日（朝鮮戦争）、七月一日《アメリカ兵朝鮮に上陸す　戦乱の機迫れるに似たり》、三日《京都金閣寺馬鹿書生の放火のため炎上せるよし》、十八日《朝鮮の戦局アメリカに非なることをいひて大笑す》、二十五日《朝鮮のいくさにアメリカ軍しきりに負けつづく　日本の運命いかゞなるべきか考へてもどうにもならぬことだけは明白也》、二十六日《朝鮮のいくさはアメリカ軍の敗北ほとんど必至なるがごとし　いよ〳〵乱世をたのしむほかに策無し　小国の人民の窮極の権利なり》、二十九日（朝鮮戦争）、一九五一年四月十一日《巷にマツカツサー（ママ）解任の報を聞く》。

冷戦下、合衆国側に組み込まれ、未だ占領が終わらない状況において、《いよ〳〵乱世をたのしむほかに策無し　小国の人民の窮極の権利なり》と記していることからは、一九五〇年代初めの日本人の思考の拘束条件について考えさせられる。

以上、容易には汲み尽くせない内容豊富な石川淳日記について、いくつかポイントを拾い出してみた。

私小説を嫌い、私小説的受容を拒絶したスタイリスト石川淳の私生活・舞台裏を書き込んだ日記が容易に読めるようになったことについては、正直、若干の戸惑いもなくはない。作品（テクスト）とのみ付き合えば良いのに、なんだかノイズが増えてしまった、と。だが、石川淳が購入して読んだ書籍名が明らかになること、作品成立の経緯が明らかになること、どのような作家とどのような交流があったことが分かること、それが作品理解のためにマイナスになるなどということがあるだろうか。

石川淳作品・石川淳文学の理解のために、言及のある他の作家についての理解のために、戦後のフランス文学受容状況についての理解のために、文学史的な新たな認識のために、その他さまざまな知的関心のために、この石川淳日記が役立たないはずがない。しっかり役立てようではないか。

（日本女子大学教授）